

モダン・ジャズ・コーラスの草分けとして知られ、モダン・ジャズ・コーラスは彼らが始めた、と言われるフォア・フレッシュメンの結成は1948年。それから50年を超える長い歳月を経た今日も、このグレートなグループはたくましく活動を行っている。オリジナル・メンバーは1人もいなくなったが、逸材たちが引き継いできた。フォア・フレッシュメンはヴォーカルだけでなく、4人それぞれが楽器演奏も行うグループだ。歌唱と演奏の双方に豊かな才能を持っている人物でなければ、F・フレッシュメンのメンバーは務まらない。そういう4人が揃って、F・Fの伝統を譲りながら、鋭い時代感覚で幅を広げ、常にフレッシュな魅力を生んでいるのだから頼もしい。

F・Fの人気はとても高い。アメリカ・ダウンビート誌の2000年度読者投票では、ヴォーカル・グループ部門の第1位を得ている。得票数は202。2位のデイク6は172、3位のマンハッタン・トランスファーは155だ。F・Fはしばしば日本公演を行って、古くからのファンを喜ばせるのみならず、新しいファンをつくっている。2003年11月にも来日した。

フォア・フレッシュメンの結成だが、そもそもの始まりは1947年の夏。インディアナポリスのアーサー・ジョーダン音楽院に入ったドン・パーバー（1927年生まれ。楽器はギター）とロス（1928年。ドラムスとトランペット）の兄弟は、知り合ったハル・クラッチ（トランペット、メロホーン、ベース）とコーラスと演奏でアルバイトをしようと、マーヴィン・ブルーイットを誘ってハルズ・トッパーズを結成した。彼らはパーバー・ショップ・スタイル（つまりアメリカで19世紀末から流行した理髪店員中心の素人コーラスで、その四重唱には比較的容易なクローズ・ハーモニーが使われる）のパフォーマンズで好評を得たが、やがて新しい方向を探り、大胆なオープン・ハーモニーを使い、アドリブも工夫し、グループ名もザ・トッパーズに改めた。彼らの新しさは人気を呼んだという。48年の春、ブルーイットが脱けることになった。そこでパーバー兄弟はいとこのボブ・フラニガン（1926年。トロンボーンとベース）をジョーダン音楽院に入学させ、グループに加えた。これを機にフォア・フレッシュメンと名乗って本格的な活動に入る。

1950年のようだが、F・Fはあるマイナー・レーベルで録音した。後にプレミア・レコードが買い取り、コロネット・レーベルのオムニバスLPで再発売している。「ポインシアーナ」「ロッキン・チェア」など4曲。バイド・バイパズとメル・トーム&メルトーンズを合わせたようなコーラスだが、オープン・ハーモニーの扱いにF・Fらしさが見える。“私はいつもスタン・ケントン楽団のトロンボーン・セクションのリードのように演奏したいと考えていた”とフラニガンは後年に語っているが、1950年3月にオハイオ州デイトンのクラブに出演した時、そのケントンが聴きに来て認めてくれた。彼は自分が所属しているキャピトル・レコードにF・Fを紹介。会社はすぐにFFと専属契約を結んだ。

1952年の夏に「イツ・ア・ブルー・ワールド」がヒットして人気上昇。忙しいツアーにクラッチは疲れて53年春に脱退。ケン・エレイアが加入。55年にエレイアが脱けてケン・アルパーズが参加。60年にドン・パーバーがソロ歌手になるため脱退（61年10月にハリウッドで交通事故死）。ビル・カムストックが参加。という具合にメンバー変動があって、現在は1992年に加入したボブ・フェレイラ（4thヴォイス、ドラムス）を中心に、ブライアン・アイケンバーガー（1st Vo. ギター）、カーティス・カルデロン（2nd Vo. トランペット）、ヴィンス・ジョンソン（3rd Vo. トロンボーン）となっている。

このアルバムは2003年4月24日、オランダのラーレンにあるシンガー・シアターにおけるライブ録音。1曲目から8曲目までF・F4人のパフォーマンス。9曲目からラストまでは日本でも評判のギター奏者ジェシ・ヴァン・ルーラーを含むジャズ・オーケストラ・オブ・ザ・コンセルトヘボウ（指揮ヘンク・メウトヘール）との共演。曲名はF・Fお気に入り曲大会。ヴァイタルに歌い、演奏し、フレッシュな興趣で徹底的に楽しませてくれる。さすが！！と惚ってしまう聴きものだ。な

Young And Foolish ~Live In Holland

ヤング・アンド・フーリッシュ ~ライブ・イン・オランダ

The Four Freshmen

フォア・フレッシュメン

- ヤング・アンド・フーリッシュ Young And Foolish 〈A. B. Horwitz - A. Hague 〉(2：23)
- インヴィテーション Invitation 〈P. F. Webster - B. Kaper 〉(2：45)
- 釣りに行こう I'm Gonna Go Fishin' 〈P. Lee - D. Ellington 〉(3：02)
- インディアン・サマー Indian Summer 〈V. Herbert - A. Dubin 〉(2：53)
- エヴリタイム・ウイ・セイ・グッバイ Everytime We Say Goodbye 〈C. Porter 〉(3：18)
- エンジェル・アイズ Angel Eyes 〈M. Dennis - K. Brent 〉(3：49)
- ユー・コール・イット・マッドネス You Call It Madness, I Call It Love 〈Dubois, Conrad, Columbo, Gregory 〉(2：59)
- アフター・ユーヴ・ゴーン After You've Gone 〈H. Creamer - T. Layton 〉(2：36)
- デイ・イン、デイ・アウト Day In Day Out 〈J. Mercer - R. Bloom, 〉(2：36)
- ポインシアーナ Poinciana 〈N. Simon - B. Bernier 〉(4：32)
- ゼア・ウィル・ネヴァー・ビー・アナザー・ユー There Will Never Be Another You 〈M. Gordon - H. Warren 〉(2：28)
- デイ・バイ・デイ Day By Day 〈S. Cahn - A. Stordahl, P. Weston 〉(2：10)
- イツ・ア・ブルー・ワールド It's A Blue World 〈B. Wright, C. Forrest 〉(2：32)
- ルート66 Route 66 〈B. Troup 〉(7：16)

ブライアン・アイケンバーガー Brian Eichenberger 〈1st. voice - guitar 〉
カーティス・カルデロン Curtis Calderon 〈2nd. voice - trumpet 〉
ヴィンス・ジョンソン Vince Johnson 〈3rd. voice - bass, trombone 〉
ボブ・フェレイラ Bob Ferreira 〈4th. voice - drums 〉

録音：2003年4月24日 シンガーシアター、オランダ

<p>© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p>
<p>*</p>
<p>PRODUCED BY THE FOUR FRESHMEN SOCIETY, INC. RECORDED ON APRIL 24, 2003 AT SINGER THEATER, LAREN, THE NETHERLANDS BY JOOST DELIEBARRE FOR EUROSOUND B. V. MIXED AND MASTERED BY BEN DEMMA AND BRIAN EICHENBERGER AT SONSONG STUDIO IN LAS VEGAS, NV. REMASTERED BY VENUS 24BIT HYPER MAGNUM SOUND：SHUII KITAMURA AND TETSUO HARA. ARTIST PHOTOS：DAN DE LA TORRE. DESIGNED BY GORO. THE FOUR FRESHMEN ARE REPRESENTED BY：INTERNATIONAL VENTURES INCORPORATED 25864 TOURNAMENT ROAD SUITE L VALENCIA , CA 91355 U. S. A. 661-259-4500 WWW . FOURFRESHMEN . COM UNDER LICENSE FROM © THE FOUR FRESHMEN SOCIETY , INC.</p>

お、日本にFour Freshmen Society（代表・市浦靖。〒153-0041 目黒区駒場4-5-8）がある。

- ヤング・アンド・フーリッシュ
　　アーノルド・B・ホーウィット作詞、アルバート・ヘイグ作曲。1955年1月から上演されたミュージカル『ブレイン・アンド・ファンシー』のナンバーで、主演のデイヴィッド・ダニエルズとグロリア・マローウによって歌われた。
- インヴィテーション
　　ヴァン・ジョンソンとドロシー・マクガイアが主演した1952年度MGM映画『インヴィテーション』のテーマ曲としてプロニスラウ・ケイパーが作曲。56年にポール・フランシス・ウエブスターが歌詞を書いて人気歌曲になった。少々ミステリアスな魅力が面白い。
- 釣りに行こう
　　ジェームズ・スチュアート、リー・レミックが主演した1959年度コロムビア映画『或る殺人』のテーマ曲としてデューク・エリントンが作曲。60年に優れたソングライターでもある歌手ベギー・リーが歌詞をつけ、彼女自身のレコードで注目され、メル・トームたち多くのスターが歌って人気曲になった。
- インディアン・サマー
　　ミュージカル初期の大作曲家ヴィクター・ハーパートが1919年にピアノ用に作曲した。すぐにハロルド・サンフォードがオーケストラ用に編曲して人気を呼んだ。20年後の1939年にアル・デューピンが歌詞を書き、同年末からトミー・ドーシー楽団（歌手ジャック・レナード）グレン・ミラー楽団（歌手レイ・エパール）のレコードがヒット。
- エヴリタイム・ウイ・セイ・グッバイ

　　コール・ポーターが作詞・作曲した1944年のミュージカル『セヴン・ライヴリー・アーツ』のナンバーで、ナン・ウィンとジェア・マクマホンが歌った。45年にベニー・グッドマン楽団（歌手ベギー・マン）盤がヒット。切ないバラードだが、フォア・フレッシュメンはスインガーにして熱く迫ってくる。

- エンジェル・アイズ
　　粋なピアノ弾き語りの手手だったマット・デニスが、親友アール・K・ブレントの素晴らしい詞を得て1953年に作曲。アイダ・ルピノが主演した53年度アライド・アーティスト映画『ジェニファー』で、特別出演のデニスがピアノを弾きながら歌った。言わずと知れたFFの持ち歌。お家芸ぶりを見事に示す。

- ユー・コール・イット・マッドネス
　　1931年にグラディス・デュ・ボア、ポール・グレゴリー、コン・コンラッド、およびラス・コロンボが合作。同年秋にコロンボ盤がヒット。46年にナット・キング・コール盤がヒットしている。コロンボはピング・クロスビーの向こうを張る大人気クーラーだが、ピストルの暴発で34年9月、26歳で他界。
- アフター・ユーヴ・ゴーン
　　1918年にヴォードヴィリアンのヘンリー・クリーマー（詞）とターナー・レイトン（曲）という黒人コンビが書いた。数多いヒット盤の中にベシー・スミス27年、ルイ・アームストロング32年、ベニー・グッドマン・トリオ35年、ジャンゴを含むフランス・ホット・クラブ五重奏団37年がある。F・Fのすさまじい、火の出るような大熱演にぶっとばされそうだ。
- デイ・イン、デイ・アウト
　　1939年にジョニー・マーサー作詞、ループ・ブルーム作曲。元ベニー・グッドマン楽団の歌手だった実力者ヘレン・ウォードを迎えたボブ・クロスビー（ピングの弟）楽団盤が同年秋に大ヒット。ここから楽団と共演。
- ポインシアーナ

　　キューバ製の歌と伝えられたことがあったが、そうではなくてアメリカのパディ・パーニア（詞）とナット・サイモン（曲）が1936年に書いた。「樹の歌」という副題名がある。44年2月からデイヴィッド・ローズ楽団盤、続いてピング・クロスビー盤がヒット。これまたF・Fの得意曲としても知られている。

- ゼア・ウィル・ネヴァー・ビー・アナザー・ユー
　　マック・ゴードン作詞、ハリー・ウォーレン作曲。1942年度20世紀フォックス映画『アイスランド』に使われ、主演のジョン・ペインが歌った。映画に出演したサミー・ケイ楽団（歌手ナンシー・ノーマン）盤がヒット。F・Fのキビキビとたたみ込む歌唱が小気味よく、オーケストラの迫力もうれしい。
- デイ・バイ・デイ
　　1945年にサミー・カーン作詞、アクセル・ストーダル、ポール・ウエストンという名編曲・指揮者2人が作曲。アクセルの親友フランク・シナトラ盤、ポールの妻であるジョー・スタッフォード盤、ピング・クロスビーとメル・トーム&メルトーンズ盤がヒット。F・Fのオハコ。新編曲で楽しく盛り上げる。
- イツ・ア・ブルー・ワールド
　　1939年にボブ・ライトとチャット・フォレストのコンビが書いた。40年度コロンビア映画『ミュージック・イン・マイ・ハート』で主演のトニー・マーティンが歌い、アカデミー主題歌賞にノミネート。40年にマーティン盤、グレン・ミラー楽団盤がヒットした。
- ルート66

　　1946年にピアノ弾き語りもうまいボビー・トループが作詞・作曲。シカゴとロサンゼルスをつぶアメリカ大陸横断国道66号の歌。途中の地名や名所を盛り込んで行くところが大いに楽しい。46年夏にナット・キング・コール・トリオ盤、ピング・クロスビーとアンドリュース・シスターズ共演盤がヒット。F・Fも楽団も存分にスイングして幕を閉じる。（July. 2004　青木啓）